社団法人　日 本 補 綴 歯 科 学 会　　*Japan Prosthodontic Society*
発行人　赤川安正　　編集　広報委員会
〒 170−0003　東京都豊島区駒込1−43−9
社団法人　日本補綴歯科学会
Tel　03−5940−5451　　Fax　03−5940−5630

Letter for Members No.23 2006

http://www.hotetsu.com/　2006.10.10 発行

《コンテンツ》

第 115 回学術大会レポート…… 1−12
中国補綴歯科学会と
　学術交流協定を締結…… 12
関連学会報告…… 12−15
補綴（ほてつ）シャッターチャンス！
　2006……15, 16
海外留学先紹介…… 16

第115回学術大会レポート

特別講演　先端医療と生命倫理

講師：松田一郎先生（北医療大学長）
座長：赤川安正理事長（広大院）

松田先生と平井大会長

医療と生命倫理の関わりは，古くヒポクラテスやベルナールに始まりますが，近年の先端医療技術が進歩するなかでは，その医療の受け入れをめぐって倫理的問題と医療費の配分問題が大きくクローズアップされています．松田先生（北医療大学長）は出生前診断，代理母，脳死からの臓器移植，ES 細胞の研究などを例に，各国でその対応が異なることを説明されました．そこでは，生命倫理を考える基本として，「共通の倫理観」「その国の文化や習慣」があり，わが国固有の，わが国の国民のための生命倫理はどうあるべきかを説かれました．すなわち，「社会と人間」「時と処」をキーワードに，①自律の尊重，②危害防止，③仁恵（最大に尽くす），④正義・公正，⑤連帯などを原則として倫理を考える必要性を強調されました．松田先生は，わが国におけるヒトの遺伝学研究のパイオニアであり，欧米の生命倫理の本の翻訳をわが国で最初にされた方であります．その先生が，「日本人のための先端医療と生命倫理」を考えるうえに，私たちの文化や道徳観，生活習慣などをベースにすることを説かれ，「知識に限界があること」を十分に理解して，「時と場所」で時間をかけて議論する必要性を説明されました．さらに，この限界は科学技術の進歩で解決できる可能性があること，その根本に「人間としての優しさ」が必要であることにも言及されました．深く心に残る，きわめて有意義な特別講演でありました．

（座長　赤川安正）

海外招待講演Ⅰ　Prosthodontics and Orofacial Pain：Implications for Management

講師：Prof. Peter Svensson（University of Aarhus, Royal Dental College）
座長：皆木省吾教授（岡大院）

海外招待講演Ⅰとして，Prosthodontics and Orofacial Pain：Implications for Management と題して，デンマーク・Aarhus 大学 Royal Den-

Prof. Peter Svensson と赤川理事長

tal College の臨床生理学講座教授である Peter Svensson 先生の講演が行われました．彼は，Journal of Oral Rehabilitation の Editor in Chief であり，同雑誌の積極的な改革（臨床に直結した研究を重点の一つに置く方向性）の牽引力となっている人物でもあります．

講演は，1．Neurobiology of orofacial pain，2. Diagnostic work-up，3. Management strategies の 3 つの観点にまとめられており，わかりやすくかつ up to date な内容でした．特に，臨床生理学講座という講座名称からもわかるように，基礎医学的知見を臨床の観点も交えて解釈・応用しているスタンスは，臨床家の立場として非常に有用なスタンスであることがあらためて実感されました．講演は，実際の 1 名の女性患者のインプラント後の疼痛に焦点を合わせて，上記の 1〜3 の観点から解説を加えるという形式で進められました．

この講演のなかでは，中枢の可塑性（Neural Plasticity）についても，下顎前歯を抜歯されたモグラネズミにおける大脳皮質の反応等も例示しながら分かりやすく述べられており，このような中枢の可塑性に由来して，疼痛そのものがたとえば neurodegenerative disorder といった状態を形成することが強調されました．また，このなかで紹介された報告として非常に印象的であったものの一つは，神経筋信号によって動かすことのできる“機能する義手”を装着・使用することによって，phantom pain（幻想痛）が著明に改善されるというものでした．単なる形態のみを模した非機能的義手ではこのような変化は起こらず，肢断端からの信号を利用した機能性義手を装着した場合にのみこのような変化が観察されるとのことでした．これは，補綴という領域の機能回復の重要性と将来性を示唆するものと感じられました．

同時通訳が行われたこともあり，全般に大変聞きやすく，また重要な示唆に富む講演でした．

（座長　皆木省吾）

Happy Smiles & Heartful Communication

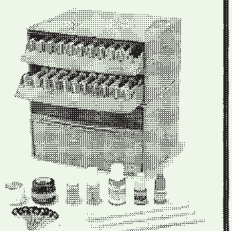
デンタルエステをはじめてみませんか

MORITA

審美性を追求し、自然感のある透明性と優れた色調再現性を実現しました。

操作性と研磨性を向上しました。

専用のガラスファイバー「EGファイバー」を用いることで、メタルフリーブリッジの製作を可能にし、臨床用途を拡大しました。



ハイブリッド セラミックス

エステニア® C&B

■標準価格 スタンダードセット 128,000円

●医療機器承認番号21500BZZ00534

製造販売元 クラレメディカル株式会社

販売元 株式会社モリタ 東京本社 東京都台東区上野2-11-15 〒110-8513 TEL:03-3834-6161 大阪本社 大阪府吹田市垂水町3-33-18 〒564-8650 TEL:06-6380-2525

●掲載商品の標準価格は、2005年4月21日現在のものです。
標準価格には消費税等は含まれておりません。

www.dental-plaza.com

海外招待講演Ⅱ　Biomechanical and Epidemiological Consideration of Implant Supported Overdenture

講師：Prof. Regina Mericske-Stern（University of Bern, Department of Prosthodontics）

座長：古谷野　潔教授（九大院）

Prof. Regina Mericske-Stern

高齢化が著しい今日，インプラント支持オーバーデンチャー（以下 ISOD）は無歯顎者に対する治療オプションとして欠くことのできないものとなっています．そこでこの分野の世界的なリーダーの一人であるスイス・ベルン大学補綴学の Mericske-Stern 教授をお招きし，Biomechanical and Epidemiological Consideration of Implant Supported Overdenture というタイトルで，ISOD について長期経過臨床例も交えて，疫学的，およびバイオメカニカルな側面から整理していただきました．

まず，さまざまな統計および疫学データを用いて，「近年，先進国ではカリエスは減少しているものの，高齢化が進み無歯顎者が増加しているが，その大部分は，いまだインプラント治療を受けておらず，今後，無歯顎に対するインプラント治療の需要はさらに増すものと思われる」ということが強調されました．

次いで，短期および長期の臨床例の観察により，

下顎の ISOD は十分に予知性の高い治療法であることが報告されているが，上顎の ISOD に関しては十分な報告がないことが解説されました．

さらに，ISOD のバイオメカニクスに関わる要素として，骨質と骨量，インプラントのサイズ，インプラントの本数，配置，埋入方向，連結して初期固定するか連結しないか，ISOD の維持がリジットか緩圧か，パッシブフィット，ISOD のデザイン，顎間関係，機能時の荷重などについて，実験研究，臨床研究，そして，自身の症例など，多くのエビデンスを用いて幅広いディスカッションがなされました．

講演には，無歯顎の治療法として ISOD を用いる際に具体的に参考となることや今後の研究の方向性のヒントなどが多く含まれていて，本学会会員の今後の臨床および研究の展開にとって有意義であったものと思われます．

（座長　古谷野　潔）

ジョイントシンポジウム　補綴歯科は嚥下障害にどう関わるか？

座長：谷口　尚教授（東医歯大院）
講師：山田好秋教授（新大院）
「口腔生理学の立場から」
吉田光由先生（広大院）
「歯科補綴学の立場から」
小野高裕助教授（阪大院）
「口腔腫瘍術後患者の嚥下障害に対する補綴的アプローチ」
熊倉勇美教授（川崎医療福祉大）
「言語聴覚士（ST）の立場から」

本大会では，日本顎口腔機能学会ならびに日本顎顔面補綴学会との三学会によるジョイントシンポジウムが，「補綴歯科は嚥下障害にどう関わるか？　How Should Prosthodontic Treatment Play a Part in the Rehabilitation for Dysphagia？」をテーマに，大会初日に開催されました．

嚥下障害に対する補綴歯科の役割を明確にすることを目的に，「口腔生理学の立場から」（山田先生，新大院）では，嚥下機能およびその障害が解剖学的ならびに生理学的側面から詳細に解説され，歯科補綴治療が適応か否かの診断が適切にできることの重要性が強調されました．また，「歯科補綴学の立場から」（吉田先生，広大院）では，いわゆる 8020 達成者と同世代の上下顎無歯顎患者の嚥下動態を X 線嚥下造影検査法により比較し，無歯顎患者に義歯装着による嚥下機能の改善がみられる実例が示され，嚥下に関わる口腔機能の評価ができることの重要性が示されました．さらに，「口腔腫瘍術後患者の嚥下障害に対する補綴的アプローチ」（小野先生，阪大院）では，腫瘍の発生部位と手術方法により咀嚼・嚥下障害の様相が大きく異なることが示され，嚥下障害のタイプに応じた顎補綴による具体的アプローチと舌圧センサシートによる嚥下機能定量評価法が紹介されました．最後に，「言語聴覚士（ST）の立場から」（熊倉先生，川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科）では，言語聴覚士の社会的立場，職務内容などが詳細に紹介され，医療におけるこれまでの関わりと今後の補綴歯科とのコラボレーションの可能性が示されました．

今回のジョイントシンポジウムを通して，「補綴歯科は嚥下障害にどう関わるか?」に対する解答の糸口が見出せたことから，今後，補綴的対応により嚥下障害を改善することのできる補綴歯科専門医の育成が望まれます．

（座長　谷口　尚）

シンポジウムⅠ　時間軸から見たリスクファクターと補綴歯科治療

座長：武田孝之先生（東京支部）
講師：斎藤純一先生（山形県開業）
「過剰な咬合力の病態について」
鈴木　尚先生（東京支部）
「欠損補綴の抱えるリスクファクター」
武田孝之先生（東京支部）
「時間軸から見たリスクファクターと補綴歯科治療」
矢谷博文教授（阪大院）
「補綴装置失敗のリスクファクターに関する文献レビュー」

初診時の歯列，咬合の崩壊度が同じであっても患者さんによって補綴歯科治療後の経過が大きく異なる理由を明らかにする目的で本シンポジウムを行いました．

まず，武田（東京支部）から咬合支持数，現存歯数，歯列内配置などの欠損形態，および崩壊スピードがリスクの一要因となること，そして，インプラントを用いて擬似的に欠損形態の悪条件を排除した後にさらに崩壊原因を観察すると，過大な力が関与している症例がさらなる崩壊をきたすことを提示しました．

続いて，鈴木先生（東京支部）から欠損形態の

類似している 2 症例を提示していただき，安定症例とさらに崩壊が進行する症例を比較すると，そこには齲蝕，歯周病という歯の二大疾患に続き，第三の原因として力の要素を追及する必要性を提示されました．

そして，斎藤先生（山形県開業）からアイヒナーの B4 症例という欠損歯列として厳しい条件下において，長期的に安定しているまれな症例と問題が次々と起こる症例を提示され，力をかける側と受ける側の相対的なバランスで力の問題を考える重要性を示唆されました．

最後に，矢谷先生（阪大院）から文献的考察をもとに補綴装置が失敗に至るには，細菌感染，荷重，技術（補綴設計）という三つのリスクファクターがあり，複合的にリスクが絡んで補綴治療後の経過に影響を与えるという報告がなされました．

ディスカッションにおいては，リスクファクターの重み付けとコントロールの容易度という観点から論議がなされ，以下のことが示唆されました．

1．齲蝕，歯周病という細菌感染はメインテナンスによってコントロールされやすく，リスクとしては残るものの影響を排除しやすくなってきている．

2．技術，設計は進歩の著しい分野であり，リスクとしては小さくなる．

3．荷重を考える際にはパラファンクションと相対的な力の二つの観点があり，いずれも大きな影響因子でありながらコントロールしづらく，欠損拡大に対して重要な要素となること．

特に力の要素を今後，臨床，研究両面において追及する必要性が改めて示唆されました．

（座長　武田孝之）

ハイブリッド型硬質レジン
パールエステ 誕生
口腔内でのツヤの持続を実現!!
真球状のフィラーを高充填
保険適用外
歯冠用硬質レジン（管理医療機器）承認番号21600BZZ00301000
カタログ請求はインフォメーションサービス
0120-54-1182 受付時間 9:00～12:00／13:00～17:30（土・日祭日を除く）
※パールエステは充填用コンポジットレジンではありません
株式会社トクヤマデンタル
http://www.tokuyama-dental.co.jp
本社：〒110-0016 東京都台東区台東1-38-9
TEL 03-3835-7201

シンポジウムⅡ　メタルフリー補綴歯科治療の最前線

座長：三浦宏之教授（東医歯大院）
講師：三浦宏之教授（東医歯大院）
「メタルフリー修復の現状と展望」
高橋英登先生（東京支部）
「メタルフリー修復の現況とこれからの展望」
舞田健夫教授（北医療大）
「Fiber Reinforced Composites Bridge によるメタルフリー修復の現状と展望」
中村隆志助教授（阪大院）
「メタルフリー補綴の変遷と現状」

高橋先生と平井大会長

歯冠補綴材料として従来，金属が広く用いられてきました．金属は適合性，強度など非常に優れた物性を有しており，適応範囲が広く，長い実績もありますが，その一方で，歯肉や歯根の変色，歯根破折，アレルギーなどの問題も起きています．そこで，最近では審美的な要求やアレルギー回避等の観点から，メタルフリー修復がすでに多くの臨床に取り入れられ，高い関心を集めています．

支台築造においては，日本でもようやくファイバーポストが認可され，歯質保護，歯根破折防止の観点からファイバーポストを応用したレジン築造が臨床応用されるようになってきました．さらに，歯冠補綴においても，材料の開発が進み，セラミックス，ハイブリッド型硬質レジンを用いたメタルフリー修復の適応範囲が広がり，審美修復の世界も変貌してきています．

そこで，本シンポジウムでは，メタルフリー修復について，臨床家を含めた 4 名の先生方をお招きしてシンポジウムが行われ，会場に座りきれずに後方に多くのお立ちの先生がいらっしゃる盛況のなかで，材料学的・臨床的観点から活発な討議が行われました．最初に中村先生（阪大院）にメタルフリー補綴の変遷をご紹介頂き，使用する材料の特徴や臨床応用における注意点などについてお話し頂きました．ついで，舞田先生（北医療大）に，FRC ブリッジの長期臨床例をご紹介頂き，こ

のブリッジの可能性と今後の展望について講演を頂きました．三浦（東医歯大院）はファイバーポストを応用したレジン築造，ジルコニアを応用したオールセラミックブリッジについてお話をさせて頂き，最後に高橋先生（東京支部）にメタルフリー修復の選択基準，臨床応用上の使い分け，接着技法についてお話し頂きました．

メタルフリー補綴の現状と今後について考慮すべき事項が明確となり，明日への臨床指針が得られた大変に有意義なシンポジウムでした．

（座長　三浦宏之）

シンポジウムⅢ　歯科補綴学教育における模型実習の現状と今後

座長：馬場一美講師（東医歯大院）
講師：越野　寿助教授（北医療大）
「全部床義歯補綴学基礎実習の見直し―“作る”実習から“診る”実習へ―」
原　哲也助教授（岡大院）
「臨床に役立つ部分床義歯補綴学模型実習」
北條　了助教授（神歯大）
「臨床手技をシミュレートした補綴基礎実習―更なる変革を求めて―」
小川　匠先生（鶴見大）
「問題解決型教育法（PBL）の支台歯形成実習への応用」

講師の先生方

歯科補綴学教育における模型実習は，伝統的に補綴装置の製作に主眼を置いて行われてきました．しかし，近年，共用試験の導入などの歯学教育全体の枠組みが変化していくなかで，臨床実習前の模型実習のあり方について，その内容を再検討する必要が生じてきました．

本シンポジウムでは，実際に実習内容の向上にむけて尽力されている，4 人の講師をお迎えして，越野先生（北医療大）には，無歯顎補綴治療教育用ファントムを用いた実習について，原先生（岡山大）には，歯科医師として必要な診療と技工操作に重点を置いた実習について，北條先生（神歯大）には早くから取り組まれてきた臨床手技模擬実習について，小川先生（鶴見大）には問題解決型教育法の支台歯形成実習への応用についてご講演を頂きました．いずれの先生も方法論に焦点を当て，担当されている実習の特徴と問題点について具体的に解説して頂き，受講者にとって大変興味深く参考になる内容でした．

総合討議では，実習に対する学生評価，模型実習における技工教育の担う役割，カリキュラムのなかでの模型実習の役割についてのご意見・ご質問があり有意義な意見交換が行われました．今回は時間が許さず，技工教育と歯科理工学との関連や，模型実習と臨床シミュレーションとのすみわけなどについてまで包含できませんでしたが，これらについては今後の課題とさせて頂きたいと考えます．最後に，本シンポジウムが，歯科補綴学教育における模型実習の質の向上のための一助となれば幸いです．

（座長　馬場一美）

研究セミナーⅠ　歯科補綴学の統計学：応用編

座長：田上直美講師（長大）
講師：田上直美講師（長大）
「歯科補綴学における統計学　序論」
横山徹爾先生（国立保健医療科学院）
「医学統計の応用のこつ」

今回の統計セミナーは 114 回大会に続く企画でしたので，前回との区別をどのようにすべきか散々悩み，とにかく「応用編＝実践編」であることを前面に押し出すこととしました．具体的には，

1．前回に引き続き講師をお引き受け頂いた横山先生（国立保健医療科学院）には，補綴研究に即した解析法をできるだけ多くご呈示・ご説明頂く．

2．座長兼講師（田上，長大）は統計着手に不可欠な要点のみを話し，統計そのものに関する話はしない．

横山先生には当初より「補綴統計を具体的にわかりやすく短時間で」という無理な注文を致しました．補綴誌を含む補綴系論文数部を事前に送りつけて，「応用編」にふさわしいモデルケースのピックアップもお願いしました．すべての無理難題に対しご多忙中にも関わらず真摯にご対処頂き，基礎（前回の復習を含む）と応用を網羅した素晴らしいご講演をご準備・ご講演下さった横山先生に対し，深く感謝の意を表します．

2 日目午前後半の枠で行われた研究セミナーⅠ

は，5 本並びの企画の 1 本であり，レジュメの数も多いのか不足するのか不安なままで用意しましたが，蓋を開けてみると，多くの方にご聴講頂き安堵しました．若手の研究志向の方のみでなく，ベテランの域に達した先生にも多数ご参加頂き，しかも多くの方が熱心にメモを取られていたのが印象的でした．会員の皆様からのアンケートを拝見しても確かな手応えが感じられ，研究推進に統計が不可欠であることを改めて認識した次第です．

手許に残る横山先生の統計資料は，皆様の今後の研究のバイブルとなること必至です．都合上，どうしても聴講できなかった先生方には，ぜひ下記より資料をダウンロードされることをお勧め致します．

http://www.niph.go.jp/soshiki/gijutsu/staffs/yokoyama/etc/hotetsu2006.pdf

（座長　田上直美）

研究セミナーⅡ　PRP スキルアップセミナー

座長：松村英雄教授（日大）
講師：細川隆司教授（九歯大）
「投稿論文のブラッシュアップと査読への対応」
菊池雅彦教授（東北大）
「査読者からみた英語論文投稿の問題と対策」

本学会第 115 回学術大会（札幌市）において，2 日目に研究セミナーⅡとして「PRP スキルアップセミナー」が開催されました．ご承知のように学会の英文誌 Prosthodontics Research & Practice（PRP）は今年から年間 4 号発行されています．今回のセミナーは PRP の編集方針を会員に周知し，今まで以上に多くの論文を投稿いただくことを目的として企画されました．第 114 回学術大会（新潟市）に引き続き 2 回目の企画となりましたが，演者と内容を変更して行いました．

まず，九歯大の細川先生が「投稿論文のブラッシュアップと査読への対応」について講演されました．トピックスとして，1）英語で論文を書くことの意義，2）投稿規定の読み方，3）投稿前のブラッシュアップ，4）ピアレビューシステム，5）査読者への対応などをあげ，実例をもとに原稿完成までのステップをわかりやすく解説頂きました．

続いて東北大の菊池先生が「査読者からみた英語論文投稿の問題と対策について」と題して講演されました．ポイントとして，1）英語論文にみられる問題，2）論文投稿における対策，3）査読者からの提言など，査読者側に立った話題を御提示頂きました．若手研究者にとっては英語論文投稿に際して大変参考となる内容でした．

なお，編集委員会では講演の内容を広く会員に周知するため，各支部会においても PRP セミナー開催をお願いしており，すでにいくつかの支部学術大会で実施させていただきました．関係各位にお礼申し上げるとともに，本年開催予定の支部に対してはご協力と多数の会員の参加をお願いいたします．

PRP は年 4 回の発行となったことで論文受理から掲載までの時間が大幅に短縮されました．通信文書が日本語でやりとりできるメリットを生かして PRP を積極的に活用いただければ幸いです．

（座長　松村英雄）

研究セミナーⅢ　クリニカルパスと症型分類 その 2 ー補綴歯科治療の難易度を決定するー

座長：市川哲雄教授（徳大院）
講師：窪木拓男教授（岡大院）
「補綴歯科治療の難易度を測定するプロトコルの信頼性と妥当性の検討ーエビデンスに基づく補綴医療をめざしてー」
追加発言：秀島雅之講師（東医歯大）
佐藤裕二教授（昭和大）
和気裕之先生（西関東支部）

大会最終日の最後の研究セミナーであるため参加者の少なさが危惧されたものの，セミナー終了時には相当数の参加者をいただきました．

本セミナーは前委員会で提案した症型分類に関するもので，111 回学術大会研究教育研修「日本補綴歯科学会の新たな戦略：アカウンタビリティーのある治療を目指して」に続くものです．今回は，症型分類に対しての理解をさらに深めていただくとともに，現委員会で行っている多施設大規模トライアル（“補綴歯科治療の難易度を決定する”症型分類 1（初診時の病態評価）の妥当性，信頼性を検定するためのコホート研究で，現在約 20 教室の協力を得て行っている）の現状についての報告でした．

このトライアルの実質的なとりまとめをしてい

る副委員長の窪木先生（岡大院）に，今回の大規模コホート研究の概要と症型分類 1-3（口腔QOL）およびその全体の進捗状況について，秀島先生（東医歯大）に症型分類 1-1（口腔の条件：形態的特徴），佐藤先生（昭和大）に症型分類 1-2（身体社会的条件），和気先生（西関東支部）に症型分類 1-4（精神医学的条件）について説明していただきました．窪木先生から信頼性は問題なく，またこの多施設大規模調査が世界に誇れる有効な調査になりうる可能性が示され，勇気づけられました．今までの学会，委員会の努力の結果が少し見えてきた感じです．

最後に，この調査を成功するためには，調査数と継続性が鍵を握るわけで，学会あげての協力をお願いする次第です．

（座長　市川哲雄）

臨床スキルアップセミナーⅠ　部分床義歯補綴治療を成功させるために

座長：築山能大助教授（九大院）
講師：加藤一誠教授（松歯大院）
「部分床義歯の印象採得」
河野文昭教授（徳大）
「部分床義歯の咬合採得」
山森徹雄教授（奥羽大）
「部分床義歯の設計」

左から山森先生，河野先生，加藤先生

今回の臨床スキルアップセミナーⅠでは「部分床義歯補綴治療を成功させるために」をセッションのテーマとし，加藤先生（松歯大院）には「部分床義歯の印象採得」，河野先生（徳大）には「部分床義歯の咬合採得」，山森先生（奥羽大）には「部分床義歯の設計」というタイトルでご講演をいただきました．

加藤先生は，部分床義歯補綴治療に特徴的な口腔内の状態，すなわち，硬組織（残存歯）と軟組織（顎堤粘膜）との混在，アンダーカットの存在，残存歯の動揺の可能性，および印象採得時にそれらの問題をうまく克服するための方法（歯の固定，ブロックアウト，リリーフ，咬合圧印象など）についてまとめていただきました．河野先生は，咬合採得時に問題となる残存歯の影響，残存歯と顎堤粘膜の被圧変位量の違い等への配慮，さらに，咬合支持が失われた症例や咬合高径が低下している可能性がある症例に対する配慮についてまとめていただきました．最後に，山森先生は，一般的に用いられるクラスプ義歯の設計に際し，義歯および支台歯の動揺を最小にする方法について，粘膜支持や把持の向上，顎提の近遠心的傾斜への配慮などについてまとめていただきました．

進行の面では，講師の先生方にご講演をお願いする際，基本的な事項に内容を絞っていただき，しかも時間厳守を強調させていただいたため，セッションの時間を余らせてしまいました．講師の先生方には，本来ならばもう少し余裕をもって突っ込んだお話もしていただけるはずであったと反省しております．座長の不手際をあらためてお詫び申し上げます．

なお，ご講演の内容については，今後誌上にておまとめいただく予定にしておりますのでご期待下さい．

（座長　築山能大）

臨床スキルアップセミナーⅡ　支台歯形成の科学

座長：田中卓男教授（鹿大院）
講師：内山洋一教授（北医療大）

支台歯形成は，歯牙という生体組織に不可逆的な侵襲を加えるやり直しが効かない作業です．また，形成後の形態は修復物の性能を左右する重要な因子ともなっています．しかし，実際の臨床の場において，支台歯形成の不備は高い頻度で生じていることが疑われます．修復物の短期脱落，形態や審美性不良，歯髄疾患や歯周疾患の惹起などは，しばしば経験するところです．支台歯形成の理論は確立されて久しく，それに乗っ取った形成技術を長時間かけて学ぶのになぜ失敗が生じるのでしょうか．それは結局，正確な形成が著しく難しい作業であり，修復物を装着できるということだけが目的となりがちなためと思われます．そこで，支台歯形成の困難さを克服するために，人間の感覚を廃して機械的にコントロールする方法が模索されてきました．その代表的なものに，パラレロメーターを切削装置と組み合わせたシステムなどがあります．しかし，口腔内という環境の特殊性を克服しきれず，実用化され普及した方法は

ほとんど皆無というのが実状です．

本セミナーでは，支台歯形成のノウハウが，あくまでも人間の脳，神経，筋機序がコントロールする機械加工という観点に立ち戻って述べられました．また，演者である内山先生（北医療大）の正確無比で美しい支台歯形成は広く知られています．本セミナーのなかでは DVD を使用してその支台歯形成の実技が提示され，芸術の域に達した円熟の技は会場を埋めつくした聴衆に深い感銘を与えました．

さて，このような最新の AV 機器を複数使用する講演では，トラブルのないシステム設置だけではなく，状況に応じたフレキシブルな運用が不可欠です．今回は会場に入りきれない聴衆のために，大型モニターを備えたサテライト会場が急遽準備されるなど，臨機応変で遺漏のない会場運営が印象的でした．

（座長　田中卓男）

歯科技工士セッションⅠ　補綴装置を製作・加工する技術 —手作業から CAD/CAM システムまで—

座長：末瀬一彦教授（大歯大）
講師：宮崎　隆教授（昭和大）
「歯科技工における CAD/CAM の展望」
塩沢育己助教授（東医歯大）
「補綴学的理論に基づいた技工操作」
末瀬一彦教授（大歯大）
「歯科技工の技と器械のコラボレーション」

補綴装置の製作にあたっては従来から手作業を中心に行われてきましたが，最近の新しい材料の開発や技術革新に伴って品質の安定性，経済性，時間的要素などから機械化による自動システムの導入も進んできました．そこで，これらの経緯について造詣の深い講師に概説をお願いいたしました．

宮崎先生（昭和大）は「歯科技工における CAD/CAM の展望」について工業界での CAD/CAM の応用化によって効率的に大きな成果をもたらしたことを例に上げ，歯科技工における CAD/CAM システムの歴史的変遷を詳細に述べられ，単に補綴装置の製作だけでなくシミュレーションやネットワーク技術への導入についても解説いただきました．歯科技工への CAD/CAM 導入の利点は，省力化，品質保証，コスト削減，新素材の導入であり，今後の補綴装置製作においては必須の機器であり，それを扱う歯科技工士との協調性が重要であることを述べられました．

塩沢先生（東医歯大）は，「補綴学的理論に基づいた技工操作」について補綴装置製作における形態付与は解剖学的形態以外に機能性と審美性を加味したものでなければならないことを強調され，補綴装置を製作する際に，教育的に補綴学的理論がどの程度関与するかについて歯科技工士学校の学生を対象に歯科技工の経験度と製作された補綴装置との関係から技術教育の評価とその効果について述べられました．

末瀬（大歯大）は，「技術」と「技能」の違いから歯科技工における手作業の基本的操作と CAD/CAM システムの特徴について触れ，単純な作業は機械加工に委ね，現在の歯科技工において人間の手技でしか表現できない高度な，繊細な製作プロセスを掌ることによって高品質，高精度の補綴装置の提供が可能であり，このようなシステムの構築には歯科技工士と CAD/CAM とのレベルの高いテクニックと緊密なコラボレーションが必要で，さらには，歯科医師からの詳細な情報伝達も欠かせないことを述べさせていただきました．

補綴装置は「口腔内の失われた形態と機能の回復」のために製作されますが，近年特に機械による自動化の傾向が著しいなか手作業の重要性が改めて見直されている現状にあって，補綴歯科学会において，本テーマを取り上げていただいたことに大きな意味があります．各演者の熱意ある講演に対して，予想をはるかに超える聴衆者が応えていただき「補綴歯科領域における歯科技工分野の広さ，大きさ」を痛感いたしました．

（座長　末瀬一彦）

歯科技工士セッションⅡ

歯科診療を支える歯科技工技術（テーブルクリニック）

座長：末瀬一彦教授（大歯大）
講師：山賀英司先生，和泉　健先生，古田都彦先生（東北・北海道支部）
「歯科用 CAD/CAM を用いたインプラントカスタマイズドアバットメントの製作工程と製作時の注意点」
山地康之先生，樋口鎮央先生，和田昌三先生，和田主実先生（中国・四国支部）
「CAD/CAM 臨床応用の可能性」
清水　崇先生（東北・北海道支部）
「硬質レジンの基本的な築盛法」

最近の歯科医療技術の進歩もさることながら，補綴装置を製作する歯科技工技術や材料の開発，発展は目覚しいものがあり，患者からの高度な，厳正な要求に対してかなり高レベルの技術で応えなければなりません．今回は，近年特に注目されている「CAD/CAM システム」と「硬質レジンの基本的な築盛」について 3 名の先生方にプレゼンテーションしていただきました．

和泉先生・古田先生（東北・北海道支部）は「CAD/CAM を用いたインプラントカスタムアバットメントの製作工程と製作時の注意点」のテーマでコンピュータ支援によるアバットメントの製作術式について，歯科医師サイドからの情報提供に基づいたシステム的な工程を紹介されました．

山地先生（中国・四国支部）は「CAD/CAM 臨床応用の可能性」のテーマで従来の歯科技工において必須であった WAX，埋没材，金属，鋳造などの操作から脱却した CAD/CAM システムの利便性を示され，作業範囲の拡大，作業の効率化，就業時間の短縮化，作業環境の改善について強調されました．

清水先生（東北・北海道支部）は「硬質レジンの基本的な築盛法」について自らデモンストレーションを加えながらプレゼンテーションなさいました．補綴装置の審美性を再現するためには種々多様な天然歯の細かな色調の変化を観察することが重要で，色調再現は内部から構築しなければなりません．硬質レジン前装鋳造冠の製作を例に挙げ，基本的な 3 層盛りを少しアレンジすることによって，さらに天然歯に近い色調再現が可能であることを示されました．

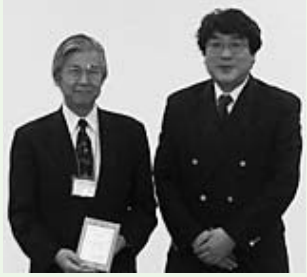
今回は，歯科技工士のテーブルセッションとして公募いたしましたが，「補綴歯科学会」に対する歯科技工士の認識も低く，多くの演題が集まりませんでした．今回の 3 名の演者には日頃の臨床技工からのアイデアを紹介していただき，補綴装置製作における技術的な勘所を教示いただきました．これからも「補綴歯科学会」において，このような歯科技工士向けのセッションを設けることはきわめて有意義でありますが，もう少しテーマを絞って，ハンズオンレクチャーになればもっと多くの歯科技工士が興味を示すと考えられます．

（座長　末瀬一彦）

歯科衛生士セッション

要介護者の口腔ケアと補綴歯科臨床
―医療と介護の連携時代に必要な知識―

座長：森戸光彦教授（鶴見大）
講師：山口　聡先生（東北・北海道支部）
「介護施設の運営からみた歯科補綴治療」
富樫七苗先生（東北・北海道支部）
「介護スタッフからみた補綴歯科臨床上の問題点」
宮腰ゆき子先生，三嶋　顕先生（東北・北海道支部）
「歯科衛生士からみた補綴歯科臨床上の問題点―専門的口腔ケアの現場から―」
森戸光彦教授（鶴見大）
「歯科補綴学からみた要介護者の口腔ケア」



森戸先生と佐々木学術委員長

要介護高齢者が増加するなかで，「全身の健康には口腔の健康維持増進が欠かせない」が常識となっています．補綴学会でこの問題に正面から取り組むことは，とても有意義なことだと思います．特に口腔ケアの専門家として位置付けられる歯科衛生士が，日常の業務のなかで補綴歯科臨床をどのように捉えているか，どのあたりに問題点があるかを明らかにすることは，本学会の責務でしょう．

介護施設を運営する山口さん（東北・北海道支部）からは，「健康の維持増進，免疫力の向上には

補綴治療は欠かせない」「歯科治療を通じて社会性の維持を保ちたい」などの意見を伺いました．ケアマネジャーの資格をもつ歯科衛生士だけで介護支援事業を行っている富樫さん（東北・北海道支部）からは，「介護予防給付に口腔機能の向上が取り入れられた意義は大きい」「専門性の高い補綴に関しての介護スタッフへの情報提供などに積極的に取り組んでいる」との報告をいただきました．介護の現場で歯科衛生士として活躍していらっしゃる宮腰さん（東北・北海道支部）からは，「食の確保の重要性」「継続的な口腔ケアの必要性」「現場での問題点」などのご意見を頂戴しました．

各演者からの発表後は，会場から活発な意見が出されました．なかでも，「専門家が関わった時の料金あるいは報酬」「評価の基準」などについて意見が交わされました．「現段階では，評価の基準となるエビデンスが十分でないために算定が困難である」「それに向けて，学会が主導的役割を果たさなくてはならない」など，現状と課題が共通認識として確認されました．関連学会が，これらの問題を解決する方向で情報交換を行うことにより，国民の保健・福祉・医療に貢献できるものと信じています．

（座長　森戸光彦）

専門医研修会　補綴装置に付与すべき咬合接触 ―部分床義歯について―

座長：横山敦郎教授（北大院）
講師：阿部　實助教授（鶴見大）
「すれ違い咬合への対応」
宮地建夫先生（東京支部）
「咬合三角のエリアⅢ，Ⅳへの対応」

宮地先生と阿部先生

部分床義歯による治療は，症例の多様性や支持組織の被圧変位量の違いから複雑で困難となることがあり，特に，すれ違い咬合や咬合三角のエリアⅢ，Ⅳは，日本補綴歯科学会医療問題検討委員会による難易度分類の level ⅢとⅣに分類され，専門医が治療を進めていく症例と考えられています．

今回の専門医研修会では，部分床義歯補綴の分野において著名なお二人の先生をお迎えし，付与すべき咬合接触を含めて広い意味での部分床義歯の咬合についてお話を伺いました．阿部先生（鶴見大）には，すれ違い咬合の定義や分類，金属構造義歯，それを進化させた咬合を保持するためのリテーナー型義歯，また，長期経過臨床例とともに臨床術式として FGP 法でバランスドオクルージョンを付与する機能的咬合印象法や取り外し埋没法，さらに歯科における公差についてのご講演をいただきました．宮地先生（東京支部）には，咬合支持に欠損を組み込んだ欠損歯列のグループ分けについての咬合三角の概念から，咬合崩壊をとめることの重要性，加えてエリアⅢ，Ⅳの症例にどのように対応すべきか，豊富な臨床例とともに，咬合支持，受圧条件，加圧因子の順に分類した具体的な処置方針についてのご講演をいただきました．

阿部先生から「咬合崩壊病」および「欠損補綴から咬合補綴へ」という病態と治療の概念について，また，宮地先生から「欠損歯列の重症度，その進行のコース，さらにスピードを考慮して，長期的な視点をもつ」というお考えのご教示をいただき，部分床義歯の難症例の治療に従事している専門医のみならず専門医を目指す若い会員にとっても，有意義な研修会でした．

（座長　横山敦郎）

市民フォーラム　歯ってさ…

司会：冲本公繪助教授（九大院）
講師：佐藤裕二教授（昭和大）
古家正亨氏（FM ノースウェイブ DJ）
小野塚　勝氏（北海道テレビ放送 HTB解説者）
越智守生教授（北医療大）

今回の市民フォーラムは，一般市民を対象に，歯科医療とりわけ「歯科補綴」という分野に興味をもっていただき，「補綴」という言葉の普及促進をはかるために，「歯ってさ…」というメインテーマで，社会連携委員会が企画しました．

市民が気軽に参加できるイベントを通じて「補綴」を身近に感じ，「補綴」という言葉を覚えていただくための 2 部構成としました．1 つは家族連れを対象とした，サッポロファクトリー煙突広場での，【児童向けの体験学習とエプロンシアター】であり，当日は指の印象模型を嬉しそうにもち帰る親子連れや，動物のキャラクターを用い，歯の

大切さを説明する衛生士のエプロンシアターを楽しむ子供たちが印象的でした．

もう一方は，サッポロファクトリーアトリウム内のオープンスペースに設営されたステージと，3 階の天井から吊された大画面液晶モニターを使用し，出演者と補綴歯科患者の市民を交えて，補綴歯科治療に関連する体験，疑問，質問などのエピソードをキーワードとして，話を展開する【市民参加型フォーラム】でした．

出演者は，札幌市民になじみのある北海道テレビの解説員・小野塚氏 と FM ノースウェイブ DJ の古家氏，さらに北医療大で補綴治療を体験された患者代表として，前歯補綴部の変色で，口を開けて笑えなかったことが受診動機の女性と，忙しくて治療をする暇がなく，口腔内の崩壊が広がったサラリーマンと称する男性です．これに対し，補綴の専門的な立場から，健康長寿に重要な補綴歯科の役割やその治療内容をわかりやすく説明する，あるいは出演者からの質問や疑問に答える講師として，佐藤先生（昭和大）と越智先生（北医療大・社会連携委員）が参加しました．

出演者から，インフォームドコンセント不足，診療室でプライバシーが保てない，「補綴」という国民のほとんどが知らない言葉をなぜ使うのか，「入れ歯・さし歯」など不健康なイメージの単語は，もう少しセンスのある表現にならないか，など多くの意見をいただきました，このことを学会は真摯に受け止め，これらの問題を解決していくために，国民への説明と情報の公開と広報が大切であると感じるとともに，市民の生の声を聞くことができる「市民参加型のフォーラム」の必要性を再認識したフォーラムでした．なお当日配布した補綴歯科をわかりやすく説明する『ホテツパンフ』は約 800 枚でした．

（司会　冲本公繪）

受賞者紹介

第 115 回学術大会の課題口演コンペティション優秀賞，デンツプライ賞受賞者をご紹介いたします．

課題口演コンペティション優秀賞

1-1-4　全部床義歯装着者における口腔立体認知能と咀嚼能力との関係
○雨宮三起子（阪大）

1-1-6　Nasal Speaking Valve：鼻咽腔閉鎖不全に伴う構音障害改善装置の開発
○洲脇道弘（岡大）

1-3-4　インプラント表面への口腔上皮細胞の接着に対する IGF-I の効果
○熱田　生（九大）

1-3-6　リン酸化 RGD ペプチドによるインプラント表面改質のナノレベル解析
○日浅　恭（広大）

1-4-2　オーバーデンチャー支台インプラント荷重の三次元解析システムの開発とその生体応用
○依田信裕（東北大）

1-5-1　精神的な問題を有する歯科外来患者に関する研究ーかみ合わせ外来患者の統計学的解析ー
○玉置勝司（神歯大）

1-5-3　高齢者における咬合力と唾液分泌速度との関係
○松田謙一（阪大）

2-1-5　脳磁図によるクレンチング直前の脳活動様相
○飯田　崇（日大松戸）

2-3-1　硬組織再生材料 OCP（octacalcium phosphate）による破骨細胞の分化誘導機序の解明
○望月文子（昭和大）

2-4-4　超小型コードレスブラキシズム計測システムの開発
○山口泰彦（北大）

デンツプライ賞

1-6-6　義歯床に付与する口蓋ヒダの形態が食品認知に与える影響
○田中　綾（東歯大）

1-6-8　部分床義歯床下粘膜面に加わる圧力の生体内多点同時測定
○末永華子（東北大）

1-6-31　機能時に歯に加わる圧縮力および引張力の生体内三次元測定
○川田哲男（東北大）

1-6-40　ガム咀嚼中の脳循環及び自律神経活動評価
○長谷川陽子（阪大）

1-6-43　ストレス下におけるクレンチングが自律神経系および内分泌系に及ぼす影響
○田原靖章（東歯大）

1-6-64　DNA マイクロアレイ法を用いたインプラント周囲の遺伝子発現の解析
○小島規永（愛院大）

1-6-68　破骨細胞分化における脱リン酸化酵素 Calcineurin の関与

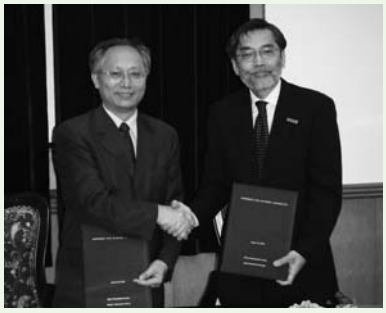
○飯田　務（阪大）

1-6-69　Statin 局所投与がインプラント周囲骨形成に及ぼす効果
○森山泰子（九大）

1-6-70　根未完成永久歯における新規間葉系幹細胞の同定
○園山　亘（University of Southern California，岡大）

＊発表者のみ記載

中国補綴歯科学会と学術交流協定を締結



Chao 会長と赤川理事長

協定締結の調印式

2006 年 8 月 25 日，日本補綴歯科学会と中国補綴歯科学会の学術交流協定が，中国四川省成都市の四川大学華西口腔医学院において締結されました．この学術交流は，近い将来アジアをリードする中国の補綴学会と交流を進め，わが国の歯科補綴学の進歩と補綴臨床の発展を中国に提供するとともに，中国の歯科補綴学の教育・研究・臨床の発展をわが国も受け入れ，相互の学術の発展と友情の拡大を行うことを目的としています．

この協定締結の調印式は，理事長の赤川が四川大学創立 110 周年に招聘される機会をとらえて行いました．この式には中国側から，現会長の Chao 教授（四川大学華西口腔医学院），前会長の Ma 教授（西安第四軍医科大学），次期会長の Feng 教授（北京大学）が出席し，厳粛ななかに暖かみあふれる式典が進みました．まずは，四川大学華西口腔医学院・Gong 副院長の歓迎の言葉のあと，Ma 先生が挨拶され，続いて Chao 会長の挨拶，そして赤川が挨拶し，その後，日本から持参した交流協定書にサインをしました．

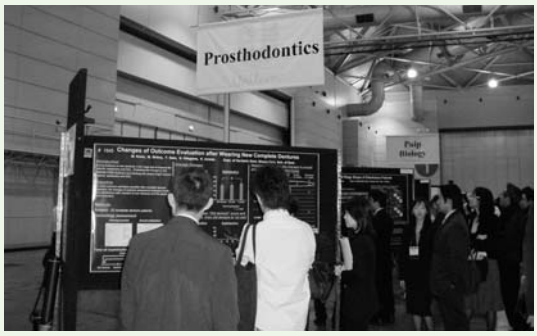
中国の補綴学会の方々は日本の補綴学会の発展を取り入れようと，とても熱心です．この調印を契機として，日本と中国との人的交流，joint meeting，共同研究など，幅広い交流が進んでいくことを期待いたします．

この調印に至る交渉と準備をしていただいた古谷野国際渉外委員長と関係各位に心から感謝申し上げます．

（理事長　赤川安正）

関連学会報告

第 84 回 IADR 総会（IADR 2006 Brisbane）



ポスター会場

84th General Session & Exhibition of the IADR が，2006 年 6 月 28 日から 7 月 1 日，オーストラリア・ブリスベーンにて開催されました．2,600 題ほどの演題のうち 800 題ほどが日本の先生方の加わった演題という，日本の研究者の参加が目立った学会でした．

会場となった Brisbane Convention & Exhibition Centre は大変大きくきれいな建物で，すべてのセッションが同一建物内で開かれていたので非常に便利で，口演・ポスターともに盛況でした．ただ，業者展示に関しては（不況の影響か？）いつもより控えめなように思われました．

また，残念なことに，ポスター会場では結構多くのポスターが落ちていたのが目につきました．ポスター発表のガイドラインには“BRING YOUR OWN velcor or tape. DO NOT use push-

pins or staples to mount your poster.”と記載されていたのですが，通常の両面テープではなく，マジックテープのような専用のテープを準備するほうが良いと思います（ボードがマジックテープのような素材でできているため）．

最後に Frechette Research Award と Hatton Awards の受賞者を紹介します．

鶴見大学の新保秀仁先生，おめでとうございました．

・Arthur R. Frechette Research Award in Prosthodontics Competition

Hidemasa Shimpo Tsurumi University Japan

Chun Xu Shanghai Jiao Tong University China

・Unilever Hatton Awards

Junior Category

1st Place：Jonathan Collier, British Division

2nd Place：Vincenzo D'Anto, Continental European Division

Senior Category（Basic Science）

1st Place：Maria Nystrom, British Division

2nd Place：Shashidharan Madhavan, American Association for Dental Research

Senior Category（Clinical Research）

1st Place：Samantha Byrne, Australian and New Zealand Division

2nd Place：Chrisovalantou Cheretakis, Canadian Division

〈広報　細木真紀〉

第 1 回国際顎関節学会ならびに 第 19 回日本顎関節学会総会・学術大会

平成 18 年 7 月 19 日（水）から 21 日（金）にかけて第 1 回国際顎関節学会ならびに第 19 回日本顎関節学会総会・学術大会が愛知学院大学病理学講座の亀山洋一郎教授を大会長として，名古屋国際会議場で開催されました．今回ははじめての国際顎関節学会との併催で，学会初日の 19 日（水）は，特別講演 1「TMD：Past, Present and Future」（Dr. Laskin D：Virginia Commonwealth University），教育講演 1「Current and Future of TMJ Imaging」（Dr. Westesson PL：University of Rochester），教育講演 2「TMJ Animal Model」（Dr. Goss AN：Adelaide University），教育講演 3「顎関節症と再生医療」（田畑泰彦教授：京都大），日韓交流講演（Dr. Chung H：Korean Society for Temporomandibular Joint Corporation, 他 3 名）が行われました．学会 2 日目の 20 日（木）は，特別講演 2「顔面筋および咬筋の不随意運動」（木村　淳教授，アイオワ大），シンポジウム 1「顎関節症・口腔顔面痛と心理社会的因子」（小林義典教授：日歯大，Dr. Stohler CS：University of Maryland，和気裕之先生：みどり小児歯科），シンポジウム 2「顎関節症と消炎療法」（Dr. Heir GM：University of Medicine and Dentistry of New Jersey, Dr. Nitzan DW：Hadassah School of Dental Medicine, 石丸純一先生：岐阜県立岐阜病院），シンポジウム 3「顎関節症における理学療法」（羽毛田　匡助教授：東医歯大，南　隆子先生：帝京整形外科クリニック，栗田賢一教授：愛院大），トピックスディスカッション「咬合と顎関節症」（渡邊　誠教授：東北大院，Dr. Kirveskari P：University of Turku, Finland）が行われました．ほんとうに盛りだくさんで，ここの内容についてコメントを入れるスペースがないのが残念です．学会全体を通じ，顎関節症の診断治療法の体系も学会発足当初に比べ，かなりはっきりしてきた感があります．来年度からの新しい理事長（覚道健治教授：大歯大）も決まり，今後のあらたな学会の方法性の模索が進んでいくものと期待されます．

（広報　佐藤博信）

第 30 回日本口蓋裂学会総会・学術集会

第 30 回日本口蓋裂学会総会・学術集会が東京慈恵会医科大学形成外科学講座の栗原邦弘教授を会長として，平成 18 年 5 月 25 日（木），26 日（金）に，長野の白馬東急ホテルにて開催されました．「患者さんにやさしい口蓋裂集学的治療」をテーマに，口蓋裂治療に必要な基礎的知識と最先端の治療を習得しチーム医療としての在り方を再確認する目的で，関連各分野から 14 演題に及ぶ教育講演が 2 日間にわたり行われました．

補綴歯科に関連した演題としては，谷口　尚教授（東医歯大院）による「口唇裂口蓋裂症例の補綴治療」と題した教育講演が行われました．チームアプローチによる有機的治療の実践によって，終末処置としての補綴治療も侵襲を最小限としたクラウンブリッジの適用が主流となりつつあり，これはチームアプローチの成果・進歩であることが示唆されました．また，デンタルインプラントの発展に伴い，口唇裂口蓋裂症例への適用が考慮されつつありますが，口唇裂口蓋裂症例の終末処置としての補綴治療においてはリラプスを阻止す

る設計が組み込まれなければならず，今後，設計段階でのリラプスに対する十分な配慮と治療後の詳細な経過観察の必要性が示唆されました．

（東医歯大院顎顔面補綴学分野　乙丸貴史）

第 25 回日本歯科医学教育学会総会および記念大会

平成 18 年 6 月 16，17 日の両日にかけて第 25 回日本歯科医学教育学会記念大会が東北大院の渡邊　誠教授を大会長として，仙台市情報・産業プラザで開催されました．今回は 25 周年の節目にあたることから特別講演が 1 題，国際シンポジウムを含むシンポジウムが 3 題組まれており，25 周年の記念式典も開催されました．

特別講演として首都大学東京大学長の西沢潤一先生が「電子工学と医学（歯学）」と題して講演をされました．国際シンポジウムでは前田健康教授（新潟大院），下野正基教授（東歯大）をオーガナイザーとして，Prof. Anders Nattestad（Univ. Nevada, Las Vegas），Prof. Peter J Polverini（Univ. Michigan），Prof. Edwin H K Yen（Univ. British Columbia），Prof. Guang-yan Yu（Univ. Peking），森尾郁子教授（東医歯大院）の 5 名の著名な先生をシンポジストとして，「21 世紀の歯科医学教育」という演題で，シンポジウムが開催されました．このシンポジウムでは EU で開始された DentEd プロジェクトから動き出した最近の世界の歯学教育の流れが紹介されるとともに，各国の教育についての取り組みも紹介され，有意義な討論がなされました．そのほかシンポジウムでは，「研修医制度に関するもの」「共用試験（OSCE に関連するものを含む）」「歯科医学教育の質の向上に関するもの」の 3 題があり，盛りだくさんで，意義深いものでありました．このうち本学会関連では共用試験 OSCE 実施状況などに関して，古谷野　潔教授（九大院）がシンポジウムで報告をされ，そのご苦労ぶりがうかがえました．そのほか，一般演題でも多くの本学会会員の発表があり，活躍が目についた学会でした．

（広報　佐藤博信）

第 23 回日本顎顔面補綴学会総会

第 23 回日本顎顔面補綴学会総会が，徳島大学医学部・歯学部附属病院高次歯科診療部の久保吉廣助教授を総会長として，平成 18 年 6 月 23 日（金），24 日（土）に，徳島大学長井記念ホールにて開催されました．特別講演，教育研修会，一般演題が行われ，一般演題では「顎義歯」「エピテーゼ」「インプラント」「機能評価」「機能回復」「統計・補助装置・その他」というセッションで，合計 28 題の発表がありました．発表 8 分間，質疑応答 7 分間で，例年以上の活発な討論が行われました．

田中教授と久保総会長

特別講演は，愛院大の田中貴信教授による「日本顎顔面補綴学会の変遷」と題するもので，口腔腫瘍術後患者の症例を交えながら，創設期から現在までの変遷について述べられました．

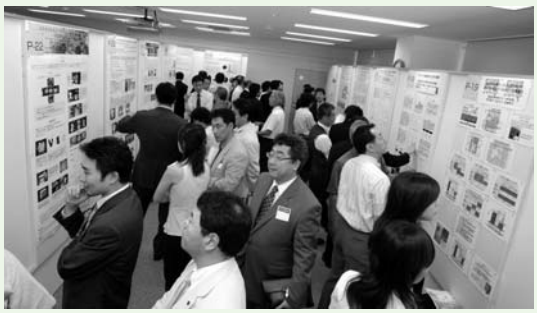
教育研修会では，「口蓋裂の形態的・機能的回復」（座長：冲本公繪助教授，九大院）をテーマに，「口唇裂・口蓋裂の形成外科的治療」（中西秀樹教授，徳大院），「口蓋裂患者の補綴治療に関連した口腔外科手術」（吉増秀實教授，東医歯大），「口蓋裂の補綴治療」（石上友彦教授，日大），「口蓋裂の機能回復」（舘村　卓助教授，阪大院）と題する講演が行われました．これらの講演から，最近の口唇裂口蓋裂患者の終末処置としての補綴治療では有機的なチームアプローチにより侵襲を最小限とした単純な設計の補綴装置が適用されるようになってきており，今後，治療前後の客観的機能評価の確立と経過の検証の必要性が示唆されました．

（広報　谷口　尚）

第 17 回日本スポーツ歯科医学会総会・学術大会

平成 18 年 7 月 15 日～16 日に 本年 2 月に竣工したばかりの岩手県歯科医師会館「8020 プラザ」（盛岡市）において，第 17 回日本スポーツ歯科医学会総会・学術大会（大会長：石橋寛二教授，副大会長：箱崎守男岩手県歯科医師会会長）が「スポーツと歯科のかけ橋を盛岡から」をメインテーマに開催されました．本学術大会の特徴として，岩手県歯科医師会，岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座の共催にて開催されたところにあると捕らえることができ，長年にわたる岩手県のスポーツ歯科における両者の協力体制が成し遂げた学術大会と感じました．

約 300 名の参加と 49 演題の発表があり，非常に活発なディスカッションが行われました．



熱気あふれるポスター会場

わんこそば大会に会場は大盛りあがりでした

印象的だった特別講演は，全日本ボブスレーチームが使用したランナー「ナガノスペシャル」を開発された堀切川一男教授（東北大院工学研究科）の工学分野からスポーツを科学として捉えたご講演でした．開発の裏側にあるご苦労をユーモアたっぷりにご講演いただきました．

また，最近スポーツ大会参加者の突然死報道に遭遇し，スポーツ・医療に関わるものとして非常に寂しい思いを感じております．そんななか，上嶋健治先生（京都大院医学研究科）に「スポーツを始める前のメディカルチェック」という内容でご講演いただき，中高年者では軽い運動でも突然死が起きるなど，私自身にも当てはまるチェック項目の多さに，事故は身近に起こりうるものと再確認いたしました．

一般の方にもご参加いただいた市民公開講座「トップアスリートを育成するために」では，競技力，精神面，チーム力，指導法，安全性をキーワードとして，高橋一男先生（紫波町体育協会），西田範次教授（富士大学），奥脇　透先生（国立スポーツ科学センター）に日頃取り組んでおられる内容をご提示いただき，一般来場者の皆様にも実践的でホットなシンポジウムと好評でした．

一方懇親会は，今までになく立食パーティー形式で行われました．予想を上回る 140 名が参加し，参加者対抗わんこそば大会（優勝者は 3 分間で 72 杯！）に盛り上がりました．

最後に，本学術大会は，日本スポーツ歯科医学会と日本スポーツ・健康づくり歯学協議会との力強い連携の場になり，わが国における今後のスポーツ歯科に関する有意義な意見交換が行われた場になったと確信しました．

（広報　金村清孝）

補綴（ほてつ）シャッターチャンス！ 2006

ウルグアイ大学での補綴実習風景

会員の皆様にも有効活用いただいております本学会ホームページの新デザイン用写真公募「補綴（ほてつ）シャッターチャンス！ 2006」に，沢山のご応募をいただきありがとうございました．

厳正な審査の結果，大阪歯科大学の小正　裕先生の作品「ウルグアイ大学での補綴実習風景」が採用されましたのでご報告させていただきます．

会員向けホームページのトップ
http://www.hotetsu.com/j/index.html
をご覧ください．

（広報委員会）

受賞者の声，ウルグアイ大学の紹介

小正　裕（大阪歯科大学高齢者歯科学講座）

この度は「補綴（ほてつ）シャッターチャンス！ 2006・補綴～ほてつ～のある風景」にウルグアイ東方共和国ウルグアイ大学での総義歯臨床実習に取り組む学生達の風景を採用していただき大変光栄に思っております．

私達の講座ではウルグアイ大学全部床義歯学講座と共同研究を進めており，その一環として昨年訪問する機会を得た時のワンショットです．学生達はとても純粋で，遠い国から来た見知らぬ私達をとびきりの笑顔と拍手で迎えてくれました．

ウルグアイ東方共和国は日本からみるとほぼ地球の裏側にあたり，あまりなじみのない国かもし

れませんが，面積が日本の半分，人口 320 万人の小さな国です．サッカーが非常に盛んで第 1 回ワールドカップの開催国でもあり，これまでに 2 度優勝しています．日本からは直行便もなくヨーロッパや北米を経由して行くのが一般的で 30〜40 時間かかります．ウルグアイにおける歯学部は 2 校で，国立ウルグアイ大学と 2000 年に設置された私立カソリック大学が首都モンテビデオにあり，それぞれ 5 年制です．補綴治療では総義歯治療が多く，金曜日は補綴系のフロアーすべてで総義歯治療が行われ，上下総義歯が約 1,000 ペソ（40 ドル）です．総義歯の臨床実習は，3 年生から始まり 2 人の学生が 1 人の患者さんを，4 年生では 1 人で 1 人の患者さんの治療に取り組み，1 人のインストラクターが 20 名の学生を指導していました．南米の国々は経済的に恵まれず，失業率が非常に高く貧富の差も大きいのが現状です．そのような環境のなかで歯科医師となるべく学生達が，目を輝かせて臨床実習に取り組む姿勢が非常に印象的で，恵まれた環境で学ぶ日本の学生達，また，私達がつい忘れてしまいがちなピュアな気持ちを想い出させてくれました．

ウルグアイは，南米で最も高齢化率の高い国で最近ポストグラデュエートコースとして高齢者歯科が誕生しました．共同研究を進めることによって日本でも大きな問題となっている高齢者歯科医療において，実り多い成果を上げていきたいと考えております．

海外留学先紹介

南カリフォルニア大学（USC）

重田優子（鶴見大学歯学部歯科補綴学第 2 講座）

今年の 5 月末から約 1 年間の予定で，アメリカのロサンゼルスにある，南カリフォルニア大学（USC）に来ています．USC は特にアメリカンフットボールが有名で 2004，2005 年に全米大学のチャンピオンに輝いております．こちらでは，日本でも顎関節症や顎顔面疼痛，睡眠時無呼吸の研究で知られている Prof. Glenn T Clark 先生のところにお世話になっています．

クラーク教室には現在，ブラジル人（2 人），インド人，台湾人の 4 人のレジデントがいます．レジデント達は，病院の 1 階にある Orofacial Pain & Oral Medicine Center で，毎日，勉強をしながら臨床にも従事しております．

左からクラーク先生，重田

研究面では，顎関節症や顎顔面疼痛，睡眠時無呼吸だけでなく，オステオコンドローマなどの腫瘍，粘膜疾患など幅広い分野で，臨床に根付いたさまざまな研究を行っています．

私は，臨床カンファレンス（週 3 回），学生の授業（週 1 回），PBL（週 1 回），また，2 つの輪読会（各週 1 回）に参加させて頂きながら，睡眠時無呼吸症候群の研究をしています．主に CBCT 画像を用いた研究で，放射線科のドクター，技師さん，また，矯正科に所属する工学部の先生に，ご協力頂きながら進めています．

UCLA 時代に，クラーク教室に留学されていた先生方は皆さん，現在，日本でご活躍されている先生ばかりで，大きなプレッシャーを感じています．クラーク先生が USC に移られてからは，岡山大の水口先生，当教室の小川が留学しています．USC のクラーク教室もすばらしいと言って頂けるよう，先輩方の努力を無駄にしないよう，がんばりたいと思っています．

まだ，4 カ月を少し過ぎたところ，これからが本番です．もし，USC にお越しの際はお気軽に声をかけて頂ければ幸いです．

（社）日本補綴歯科学会は，学術大会の年 1 回開催化など，新たな流れを実践し，さらなる発展に向け前進中です．学会 HP をご覧頂き，ご確認下さい．

社団法人 日本補綴歯科学会 広報委員会
委員長　石橋寛二　副委員長　佐藤博信
委　員　北川　昇　田中昌博　谷口　尚
　　細木真紀
幹　事　金村清孝
TEL：019-651-5111（内 4127）
FAX：019-654-3281
E-mail：kohojps@iwate-med.ac.jp
〒 020-8505　岩手県盛岡市中央通 1-3-27
岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座